

枕崎「歴史探訪ツアー」

枕崎の殿様

喜入氏を探る

戦国時代末期から江戸時代を通して枕崎の領主だった  
「喜入氏」の知られざる活躍の一端を紹介します

## 枕崎の殿様「喜入氏」について

喜入家は、島津忠弘に始まる島津家の支族である。島津宗家9代当主忠国の七男忠弘は、薩摩給黎郷（喜入）を領地として分家した。その後、15世紀末から約1世紀間は、薩摩国喜入城（給黎城）を居城とした。喜入氏を称したのは、5代季久の代からで、この代に薩摩鹿籠郷（現在の枕崎市）も加増されている。江戸時代には、薩摩藩の一所持として鹿籠郷のみを領有し、石高は4,203石余となっている。ほかに、喜入家4代忠俊の次男で、季久の弟忠道が興した分家がある。喜入本家は、江戸期を通じて鹿籠郷（現枕崎市）を領した。歴代当主のうち、季久（5代）、忠統（7代）、久亮（10代）、久福（14代）、久通（17代）、久高（18代）が、薩摩藩の家老を務めている。

### ○<sup>すえひさ</sup>季久（喜入家5代）〔天文元年（1532年）～天正16年（1588年）〕

島津忠俊の嫡子。永禄元年（1558年）以降、太守島津義久の命により所領の給黎郷（喜入）にちなみ、喜入氏を称する。勇猛な武将で合戦での勲功が多く、義久の家老に抜擢された。島津氏の九州平定戦に従い、肥後、筑後、筑前に出征し、永禄四年（1561年）軍功により薩摩鹿籠郷（現在の枕崎市）を加増された。これに伴い季久は、鹿籠郷の山之城（別名：桜之城、現桜山小・中学校）を居城とし、嫡子の久道を喜入郷に置いた。なお、薩摩国近隣の大名家や武将との和睦交渉や第15代将軍・足利義昭の就任祝いへの使者なども務めている。連歌や立花にも造詣が深く、九州を代表する文人武将でもあった。天正16年（1588年）に病没。享年57歳。

### ○<sup>ひさみち</sup>久道（喜入家6代）〔永禄元年（1558年）～慶長5年（1600年）〕

季久の嫡子。島津氏の九州平定戦において、肥後、豊後に出陣して活躍した。文禄3年（1594年）、太閤検地が行なわれた際、鹿籠において庄屋の山村与三と上方から派遣されてきた役人が論争になり、山村与三が役人を打擲して逃散するという事件が起こった。怒った上方役人によって喜入家の家老全員を切腹させるために鹿児島へ引き立てていく途中、鹿籠領内の全僧侶が家老達には非がないとして当時鹿児島に来ていた秀吉の腹心細川幽斎に訴え、そのとりなしで家老達は助命されたが、喜入家は喜入と鹿籠の領地を没収されて、永吉へ転封となった。久道は失意のうちに、慶長5年（1600年）に彼の地で病没した。享年42歳。永吉の天昌寺に葬られたため現在も、日置市吹上永吉の天昌寺跡にある。なお、久道の妻は、前鹿籠領主だった島津忠長の妹（島津尚久の次女）で、天正12年（1584年）に死去している。

島津家の九州平定戦で活躍したにも関わらず、太閤検地に反抗した家臣の失態で領地を奪われてしまった、不運の殿様である。

○<sup>ただつぐ</sup>忠統（<sup>ただまさ</sup>忠政）（喜入家7代）〔元龜2年（1571年）～正保2年（1645年）〕

喜入季久の四男、喜入久道の弟でその養子となって7代目を嗣ぐ。改名前は忠政。出家して修行中に、甥（兄久道の嫡子）の早世に伴いほかに嗣子がいなかったことから、還俗して家督を継ぐ。朝鮮出兵（文禄の役）では、島津義弘とともに従軍し、一緒に虎狩りも行なったという。朝鮮出兵中の文禄3年（1594年）、太閤検地への不手際で兄久道が領地を没収されてしまったが、慶長4年（1599年）に伊集院忠棟が島津忠恒（後の家久）に討たれた後、旧領地のうち鹿籠のみは復領された。この後、喜入家は代々鹿籠を領有することになった。慶長5年（1600年）の関ヶ原の戦いでは、敵中突破（島津の退き口）の最中に義弘一行とはぐれた後、新納旅庵らと京都の近衛屋敷に匿われていたところを徳川方の武將山口直友の軍勢に囲まれ、降伏したのち厳しい詮議があったが無事帰国できた。その後、薩摩へ逃れてきた宇喜田秀家の助命嘆願の使者となって駿府に赴き家康に弁明を行った。また、慶長19年（1614年）12月の大阪冬の陣には、太守家久に従って従軍した。その後、元和6年（1620年）には、江戸詰家老となり、薩摩藩初代藩主（島津家18代）の家久（義弘三男）の使者として、度々将軍に拝謁している。近衛信尋に和歌や書道を学び、薩摩藩政の確立に貢献した。後に後妻が切支丹であることを咎められ、家老職を辞した。正保2年（1645年）に病没。享年75歳。家臣の田代助左衛門清貞と篠原平左衛門宗次の二人が殉死した。

※ 7代忠統（忠政）から10代忠亮に至るまでの間は、領主の妻や娘がキリシタンとして捕えられるなどの大騒動があり、さらに喜入家の領主やその嗣子に病気や自決による若死が多く、継嗣関係は非常に複雑である。

※ 島津義弘公は、関ヶ原で戦没した島津豊久（旧佐土原島津家）に嗣子がいなかったため、豊久の弟「<sup>ただなお</sup>忠直」を嗣子として、吹上の永吉に領地を移封した。ところが、忠直が病気になり政務を執れなくなったため、喜入家7代忠統の子「<sup>ただひで</sup>忠栄」をその継嗣とした。しかし、忠栄も、28歳で若死にして、永吉の天昌寺に葬られた。そのため、忠栄とともに永吉に移った忠栄付きの家臣達は鹿籠に帰参した。

※ 忠統（忠政）49歳の時、最初の妻が42歳で病死した。

関ヶ原で西軍につき、合戦後処刑されたキリシタン大名「小西行長」の妻は（洗礼名カタリナ）といい、行長の死後薩州家島津氏島津<sup>よしとら</sup>義虎の三男「島

津忠清」に再嫁した。忠清亡き後は、その菩提を弔うために永俊尼と称した。二人の間に生まれた娘は、島津19代家久の奥方（側室）となった。永俊は先夫行長との間に妙身という娘があり、母永俊が島津家に入ったこともあって、妙身は忠統の後妻となった。妙身は、島原の有馬直純なおよみに嫁していたが、直純が幕府のキリシタン弾圧を恐れて信仰を捨てたため、それに怒って離縁したといわれている。妙身には、すでに先夫直純との間に於満津おまつという娘がおり、於満津は後に、宮之城島津家の島津久茂に嫁いだ。

一方忠統と妙身との間にも、津留という娘が生まれた。幕府のキリシタン禁制は日増しに厳しくなり、寛永11年（1634年）8月、永俊が捕えられ種子島に送られると、翌12年には、幕府から薩摩藩に「鹿籠家中のキリシタン20名を捕え、島送りにせよ。」との厳命が届いた。藩庁や鹿籠では処置に困り、結局12名を捕えて種子島に送っている。さらに、翌年には、領主忠統の妻妙身、その娘於満津と津留も捕えられて種子島に送られた。種子島の大長野という所に粗末な小屋を建てて住まいとした。永俊、妙身、津留の3人は、島で生涯を終えたが、宮之城島津家に嫁いでいた於満津だけは密かに連れ戻されて、島津久茂の許に帰り、95歳の天寿を全うしたという。

※ 永俊が小西行長の妻であったという説には、異説がある。豊臣秀吉が島津征伐のため薩摩に侵攻してきたとき、出水が本拠地であった薩州家島津氏の島津忠辰ただときは、かつて薩摩に強大な勢力を誇っていた自家の勢力を盛り返そうと、島津本宗家からの独立を図った。そこで秀吉軍に逸早く降参した後、川内まで道案内をするなど協力したが、それにも関わらず、本領安堵のみの仕置きで終わった。これは、当初豊臣軍に敵対した伊集院忠棟が、戦後豊臣政権から島津本宗家に並ぶほどの領地を加給されたのと好対照である。忠辰は、その後も豊臣政権に島津本宗家からの独立を図るべく画策を続けたが、朝鮮への出陣に際して、島津本宗家との同陣を拒んだことが秀吉の怒りに触れ、領地没収の後、一族は肥後の宇土城主小西行長にお預けとなった。この時期に、忠辰の弟忠清が小西行長の家臣「皆吉統能の娘」を嫁とした。これが、永俊という説である。実際、文献に残されている小西行長の妻の洗礼名はジュスタでありカタリナではない。また、切支丹は一夫一婦制に厳格であったことから、小西行長に側室がいたとは考えられず、また、初婚である島津忠清の妻となった経緯も不自然であることから、この説が正しいような気がする。ただ、種子島家譜には「永俊は、はじめ肥後宇土城主小西摂津守行長の室にして」というくだりがあり、喜入氏系図にも喜入家忠統の妻となった妙身について「生母は小西行長の女なり」と記されている。

※ 喜入家8代「忠高」は29歳で自決し、既にその子亀次郎も11歳で没しており、また、異母兄の忠栄は、永吉島津家を継いでいたため、喜入家には、後嗣がない状態だった。先代領主の忠統は後嗣を賜うよう藩主に上申したが、許されること無く逝去した。そのため、太守光久は、島津豊前守久賀の次男「久延」に命じて跡継ぎとしたが、その後、久延は、天然痘を患い、喜入家を嗣ぐことを辞退して喜入家を去った。

そこで、藩主光久は、光久の三男幸寿丸に命じて喜入家の嗣子とした。これが、9代「忠長」であったが、後、太守光久の命で都城島津家（北郷家）の継嗣として、都城へ転出し都城島津家17代を継いだ。そのため、忠統の子で島津弾正大弼久慶（日置島津家）の養子となっていた久憲に本家忠長の弟とし、家督を継がしめようとしたが、寛文2年（1663年）久憲は、酷く精神を病んでしまったため、種子島に幽閉されたが、そこで縊死している。31歳。これで、忠弘以来の喜入氏の血脈は絶えてしまった。

<sup>ただたか</sup>  
○忠高（喜入家8代）〔慶長11年（1606年）～寛永12年（1635年）〕

忠高は、どのような事情があったか不明であるが、忠統の後妻（母）妙身が捕えられる1年前に自決している。享年29歳。忠高の妻も前後して自決したといわれている。また、妻の兄島津<sup>ひさよし</sup>久慶（日置島津家）は藩の家老であったが、死後キリシタン（一説には一向宗）であったとされ、死体を掘り上げて磔にされた上、日置家系図から抹消されたという。このようなことから、忠高やその妻の自決もキリシタンと無関係ではなさそうである。

また、義兄の久慶については、濡れ衣だったとの説もある。久慶は前藩主家久が重用した家老で、藩主を継いだ光久にとって何かと煙たい存在であったため、それを嫌った光久が、久慶の養子になっていた久憲をうまく操って偽証させたといわれている。そのことがもとで、久憲は精神を病んでしまったとも伝えられる。

<sup>ただなが</sup>  
○忠長（喜入家9代）〔正保2年（1645年）～寛文10年（1670年）〕

島津家19代光久の三男として江戸で生まれた。喜入氏に嗣子がいなかったため、慶安4年（1651年）喜入氏の継嗣として9代目領主となった。しかし、その後、藩命で都城島津氏（北郷家）の17代目の継嗣として都城へ転出したため、鹿箆にはその墓は無い。都城北郷家は、忠長が嗣いだに後島津姓に復姓することを許されている。

※ 因みに北郷家の15代は、宗家18代島津家久の四男久直で、16代は宗家19代島津光久の次男久定であるが、兩人とも20代で早世している。

○<sup>ひさあき</sup>久亮（喜入家10代）〔万治元年（1658年）～享保7年（1722年）〕

薩摩藩2代藩主（島津家19代）光久の九男で、同じく光久の三男で兄に当る喜入忠長の養子となり、寛文3年（1663年）に喜入氏の家督を相続した。

当初は、兄忠長が当主を務める予定だったが、忠長は都城島津家北郷久定の養子に転じてしまう。そのため、久亮が喜入氏嫡流の当主となった。久亮は、貞享3年（1686年）に家老となり、2代藩主光久から3代綱貴、4代吉貴の代まで、20年間にわたって家老に在職した。久亮は、田布川など領内の新田開拓や原野開拓のほか、塩田の開発も行い、さらに水産業の発展にも心血を注いだ。連歌や和歌を得意とし、本人が百寿の願いを込めて詠んだ「万句賀親乾」自作の連歌集を残している。（南溟館所蔵）享保7年（1722年）に病没。享年65歳。

○<sup>ひさのり</sup>久致（喜入家11代）〔元禄4年（1691年）～正徳4年（1714年）〕

太守綱貴公手ずから元服を与え、宇左衛門久貴と号した。宝永4年9月家督を賜り、久致と改名。同年10月、薩州中郷地頭職に任ぜられる。享年24歳。

○<sup>ひさみね</sup>久峯（喜入家12代）〔元禄8年（1695年）～享保3年（1718年）〕

11代久致の弟。兄久致の一子釜次郎が早世したため、正徳4年家督を賜り継嗣となった。享年19歳。

○<sup>ひさもち</sup>久茂（喜入家13代）〔宝永元年（1704年）～宝暦8年（1758年）〕

久峯に嗣子がいなかったため、10代久亮の弟で桂織部久祐の三男、久茂が継嗣となった。享年55歳。

○<sup>ひさとみ</sup>久福（喜入家14代）〔享保7年（1722年）～寛政元年（1789年）〕

薩摩藩8代藩主（島津家25代）重豪公、薩摩藩9代藩主（島津家26代）斉宣公の家老職を務める。享年67歳。

枕崎に石工神園孫兵衛によって雁木（石造りの防波堤兼荷上げ施設）が築かれたのが、安永4年（1775年）と記録にあることから、久福の治世のことと思われる。

○<sup>ひさかず</sup>久量（喜入家15代）〔寛延4年（1751年）～寛政4年（1792年）〕

事歴不詳。享年42歳。

○<sup>ひさあき</sup>久欽（喜入家16代）〔安永2年（1773年）～文化9年（1812年）〕

事歴不詳。享年40歳。

○<sup>ひさみち</sup>久通（喜入家17代）〔寛政8年（1796年）～嘉永5年（1852年）〕

文政から嘉永にわたり、阿多、谷山の地頭職となる。その後、若年寄となり、薩摩藩11代藩主（島津家28代）斉彬の家老職となった。民政にも心を砕き、文政2年（1819年）正月に、枕崎・岩戸・赤崩に松を植樹し、立派な松並木や松山を作った。嘉永5年（1852年）に病没。享年58歳。

○<sup>ひさたか</sup>久高（喜入家18代）〔文政2年（1819年）～明治26年（1893年）〕

天保4年（1833年）12月15日、薩摩藩10代藩主（島津家27代）斉興の加冠により元服した。弘化4年（1847年）御小姓組番頭となり、嘉永5年（1852年）御用人となる。その後、大目付や各地の地頭を歴任し、文久元年（1861年）に、国父・島津久光と薩摩藩12代藩主（島津家29代）の忠義が公武合体路線を推し進めようとした際に、筆頭家老の島津久徴らが反対したため、久光は久徴らを失脚させた。

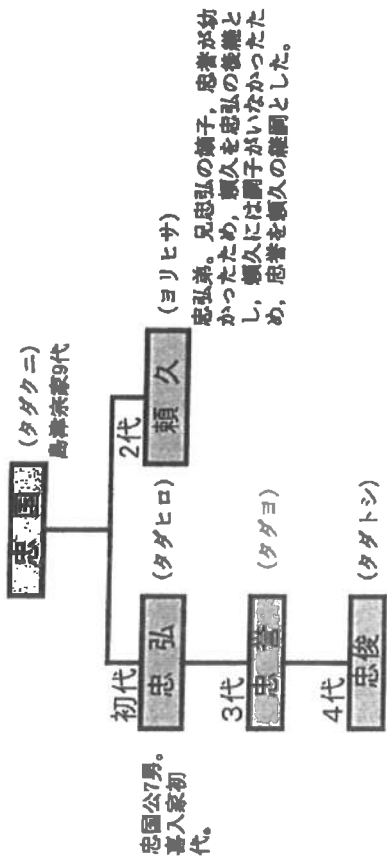
その後任として、久高が筆頭家老に抜擢された。久高は、小松帯刀とともに精忠組の大久保利通らを登用し、藩政運営にあたった。元治元年（1864年）に開成所担当となり、明治2年（1869年）の藩政改革にも参画した。明治26年（1893年）に病没。享年74歳。

明治2年の廃仏毀釈は、藩政改革の一環として実施された。それに関わった久高の墓石には神号が刻されている。幕末の薩摩藩筆頭家老として、小松帯刀を家老に推挙し共に活躍したにも関わらず、維新後は官職にも就かず、事跡を顕彰されてもいない。維新後も久光と行動を共にしたことから、久光派と目されて冷や飯を食ったのかも知れない。ちなみに小松帯刀の妻（チカ）は、忠高の妻（富）の妹である。忠高は、NHKの大河ドラマ「翔ぶが如く」に、喜入撰津守として登場した。

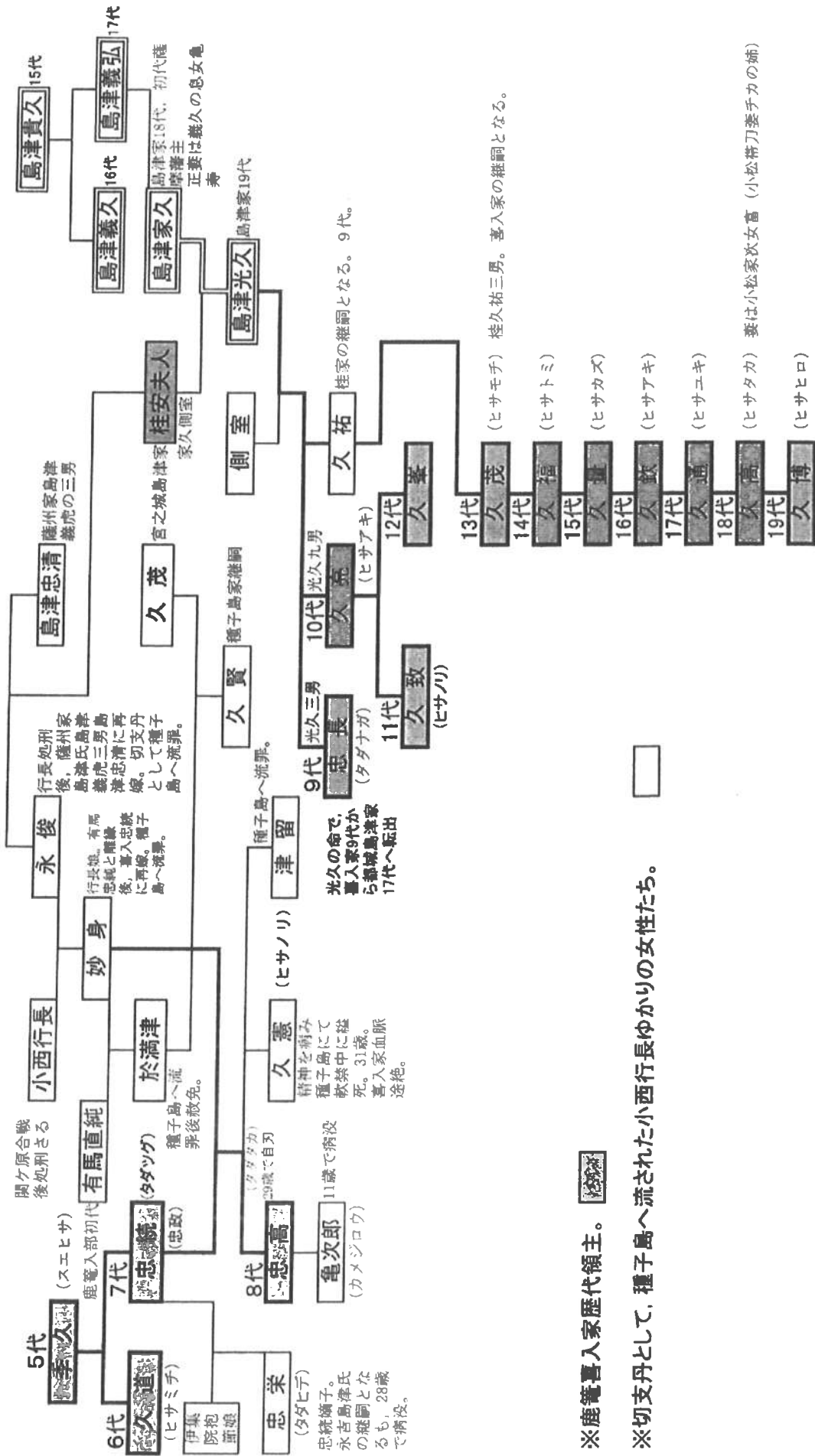




〔鹿嶋領有前の喜入家系図〕



# 【鹿籠喜入家系図】



※鹿籠喜入家歴代領主。 **忠統**

※切支丹として、種子島へ流された小西行長ゆかりの女性たち。 **久道**

# 小松家(幕末)系図

